

## 渡邊榮文先生への献辞

総合管理学部長 松尾 隆

渡邊榮文先生は、2013年3月31日をもって定年退職されることとなります。1994年4月に総合管理学部へ着任されて以来、先生が19年間の長きにわたり当学部の発展に多大なる貢献をなされてきたことに、何よりもお礼の言葉を述べさせていただきます。

当学部は、先生の恩師手島孝名誉教授のご尽力のもと1994年に創設されました。もちろん、渡邊先生も学部創設に深く係られました。その後も、先生は1998年4月のアドミニストレーション研究科（修士課程）の設置、そして2000年4月の同研究科博士課程の設置と、当学部の発展のために全身全霊取り組まれてこられました。手島先生の意思を継ぎ、今日の大地にしっかりと根を張る大樹へと総合管理学部を育て上げられてこられたのが渡邊先生である、と申し上げても決して過言ではありません。

学術研究では、渡邊先生は行政学を専門分野とし、その研究領域は多岐にわたります。先生の研究生活は、1970年代の日本では研究の初期段階にあったオンブズマンに関する研究に始まりますが、近年研究の念が懐旧の情とともに、再び静かに胸中に生じたと述べられています。また、先生は、フランス行政学の史的な研究において、数多くの優れた業績を残されています。門外漢ながらも誤解を恐れずに述べさせて頂くと、先生の研究は、19世紀フランスの行政学者シャルル＝ジャン・ボナンを忘却の淵から救い出し、ボナン行政学の全貌を緻密な研究を通じて解き明かし、彼を行政学の真の創始者として学説・思想史上の位置づけを行われた上で、その現代的意義を明らかにされ、評価されています。ボナンは先生が多大なる学問的影響を受けた人物で、現代行政について考える際の理論的支柱である、と伺っています。

また近年では、渡邊先生の研究上の関心は未開拓であったアドミニストレーション論の構築に向けられてきています。先生の研究は、アドミニストレーション論の始祖をH.ファヨールに求め、彼に傾聴しつつも、先生独自の観点からさらに広がりをもたせて展開されています。そして、アドミニストレーション概念が、現代のわが国の公と私の関係を捉える新たな視座を提示する点を指摘され、この学問の有意性を強調されます。もちろん、先生には、当学部や大学院の大黒柱ともいべき科目「アドミニストレーション総論」や「特殊講義」を担当していただきました。

先にも触れましたが、渡邊先生には学内業務においても様々な分野でご尽力いただき、1998年4月から2000年3月まで総合管理学部長と大学院アドミニストレーション研究科長という大任を果たしていただきました。学会活動では、日本行政学会、日本オンブズマン学会、日本計画行政九州支部で、理事、監事などの重責を担われています。また社会活動でも、熊本県やその他自治体の審議会委員など、地域社会への貢献では枚挙にいとまがないほど、先生は献身的に尽くされてきています。

最後に、当学部を代表して渡邊先生には謝意を表させていただくとともに、ご退職後も引き続きご健勝であられることを、また一層のご活躍を、切に念願する次第です。